
オワリ —NO— ゲーム

氷川 照

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オワリ ― NO ― ゲーム

【Nコード】

N3559BA

【作者名】

氷川 照

【あらすじ】

東京都に住む高校2年生の風見明は、ある日の学校で謎の噂を友人から耳にする。

それは、「オワリゲーム」というゲームサイトに登録した者たちが次々と不可解な死を遂げているという噂だった。

明はあくまで噂と思い、その噂を信じることはなかった。

しかし、そのサイトこそが、終わりの始まりを始めるものだった。

プロローグ

神は人間の偶像であり、存在はしない。

だがしかし、人々は自身が窮地に追い込まれたり、絶体絶命の危機に直面すると、神に頼りそして、神に願う。

存在もしないものに願っても、その状況は変化しない。当然である。

「神」という言葉は必要なのだろうか？

地球ができたのは、神のおかげ？ ——— 違う。

我々人類が誕生したのは、神のおかげ？ ——— 違う。

今、その場であなたが存在できるのは神のおかげ？ ——— 違う。

今その瞬間を決めるのは、神でもあなた自身でもない。だからと言って、運でもない。

< 決断〓絶望〓死〓自己 >

この方程式は、全ての物事において当てはまる。

少なくとも、私はそう信じている。いや、信じたい。この方程式こそ、世界であり宇宙である。

絶望の淵に立つとき、それは究極の決断を迫られた時、絶望は死を意味し、その全てが自己で左右される。

さてと、前置きはこれぐらいにして始めようか。まずは数回のテスト。そして、1回の本番。

方程式の証明を、完成させる時はきた

完成したその時、それは、終わりの始まり。

プロローグ(2)

カーテンが閉め切られ、沈黙が支配する部屋。

光源は勉強机に置かれたパソコンのみであり、部屋の明かりは豆電球さえ点けていない。

「はははっ……これか……ようやく、見つけた。」

パソコンの前に座る学生服を着た少年は、画面を見ながら微笑み呟いた。

背景が真っ黒な画面には、まるで壁に血で書かれたような文字で“オワリゲーム”と書かれてある。

その下には、入室者ナンバーとサイト利用の注意事項、そして、なぜかサイトが一番下でアルファベットのXが小刻みに揺れていた。これまでの入室者を見ると、20万以上の人がこのサイトに来ていることが分かる。

少年は嬉しさで震えているのか、それとも恐怖で震えているのか分からない手でマウスを動かし、“オワリゲーム”の文字をクリックした。

画面が切り替わり、新たな画面が出てくる。それこそ、少年が目的にしていたものだった。

——入室者ナンバー206128 命令「序」——

あなたが通う学校の先生を1人、階段から突き落とす。
制限時間は今から44時間以内。時間以内に達成できな

かつた場合

あなたが不幸となる何かが起こります。

青い画面に、黄色い文字で書かれた命令。

これだ、これだ、これだ、これだああアあああああアあ！！！！！！

少年の震えていた手はいつの間にか元に戻り、1人部屋でガッツポーズを見せた。顔は満面の笑みで満ち溢れている。

「俺から奪うものはもうない。不幸なんて怖くない。」

「けど、やるだけやるか。」

「別に警察にパクられても問題はない。事故と言えいい。」

所詮、大人は子供に甘いからな。

何年何百年経っても、それは変わることのない不条理なことだ。

L

少年は悲しげな表情で画面を見つめながら言うと、パソコンの電源を落とした。

その瞬間、少年は暗闇の中へと消えた。

イタズラメール（前書き）

少し過激な部分がありますので予めご了承ください。

イタズラメール

東京にある共学高校、同和学園高等学校。

ここは今年2013年に創設されたばかりの学校であり、それなりに校内の設備やセキュリティは万全すぎるほどである。特に、校舎は凄い。

川の字で4階建ての校舎は、全ての出入り口と3階の渡り廊下に不審者侵入防止の厚さ5cmの鋼鉄シャッター、ガラスは防弾防炎防音。

「要塞」と称しても過言ではない程の造りだ。

同和学園には現在約600名の生徒が通っており、今年の初めに行われた学力テストでは平均偏差値57.0と成績は上の方である。

「おつす!!おはよう!!」

A棟、B棟、C棟に分かれている校舎の4階は2年生フロア。

C棟の4階にある2年9組のクラスに、テンションの高い男子生徒が入ってきた。

「なにがおつすだ!!遅刻だ、前田!!」

すでに教室には33席中31席埋まっており、担任の栗関悟は遅刻してきたクラスのムードメーカーこと前田十治郎を怒鳴り付けた。それは、クラスにとって日常的なものだった。

「んだよ…あんなに怒らなくても良いだろうに。」

「おはよう、十治郎。」

「おは。」

十治郎の両隣に座っていた生徒が笑顔で声をかけた。

十治郎の右に座っているのは、学年で学力2位の成績を持つ風見明。左に座っているのはソフトボール部の主将である神楽七奈である。

「おーす。」

「相変わらず遅刻癖が直らないな。」

「時間通りに起きてるんだが、途中で道に迷っているおばあちゃんを……」

「はいはい。」

十治郎の無意味な弁解を聞き逃し、2人は前に立っている栗関の方を見た。

「今日の1時間目は、体育の寄松先生が私用のためいないので自習だ。先生は誰も来ないので、学級委員は全員を静かに勉強させること。特に前田は、席から立つな。」

「トイレ行きたいときはどうしたらいいですかー？」

「漏らしてもらって構わない。」

真面目な栗関と陽気な十治郎の会話で、全員が笑い、クラスが笑い声で包まれる。

そう。この時は、誰もがこんな日常が卒業まで続くと思っていた。しかし、現実には甘くなかった。

1 時間目 自習

午前9時となり、1時間目の開始を合図するチャイムが校内に鳴り響いた。

他のクラスは挨拶をして授業を始めるが、2年9組だけは未だに騒ぎまわっていた。無論、特に騒いでいたのは十治郎である。ガラの悪い男子に囲まれ、大はしゃぎしている。そんな彼らを、遠目で明は見つめていた。

「相変わらずうるさいね。前田君は。」

「そうだな。」

空いていた十治郎の席に、クラスメイトの月瀬弥生が明に喋りかけながら座った。

弥生は死人と思うほど肌が白く、顔がモデルや女優より綺麗で美しい。学年はおるか、学校中知らない生徒はいない程可愛いと評判だ。外見も大事だが中身も素晴らしく、“良く出来た人間”であり、彼女を嫌いな人は男女いない筈だ。

そんな彼女が、明に話しかけてきた。

「ねえ、風見君はさ、好きな人とかいるの？」

「好きな人は言えるわ……………ふえ!？」

突然の質問に、思わず自分でも発したことの無い声が出た。

弥生は驚き赤面する明の顔を見て、優しく天使の様な笑みを零した。そして、クラスの全員に見えない様に、影で明の手の上に自分の手を重ねた。

明は弥生の突然の行動を理解できず、呆然と弥生を見つめていた。まだ、顔は赤いままだ。

「いないでしょ？ねえ、今日さ、学校終わったら私の家に来てよ。」

弥生は顔を近づける。

明はようやく我に戻り、弥生の肩を持って優しく突き放した。

「ちょ、ちょ、ちょ、待つて。どうしたの？なんで……いきなり……こんなこと……」

明はあたふたしながら尋ねる。

すると、弥生は黙り込んで、その大きな瞳で明を見つめ始めた。最早、弥生の行動の意味がサッパリ分からない明。

弥生はスウィツと両手で明の頬を触ると、小声で言った。

「キスして。」

弥生はそう言うのと、明の有無を聞かずに顔を近づける。

「ちょ、み、みんないるし、て、てかてか、ちょつと待つて……！」

明は弥生の赤く綺麗な唇と弥生の大きく吸い込まれそうな目を交互に見ながら訴えかける。しかし、弥生はゆっくりと顔を近づけてく

る。

そんな明を助けるかのように、教室に誰かの着信音が鳴り響いた。着信音の鳴っていた元は、十治郎と絡んで騒いでいた吉澤竜太の携帯だった。竜太は携帯を取り出し、画面を見る。

「おいおい、授業中は携帯なおしなちゃい。」

十治郎は赤ちゃん言葉で竜太を馬鹿にした。

しかしこの時、一番近くにいた十治郎だけが竜太の異変に気付いた。

「おい、どした？」

携帯の画面を見た途端、竜太は顔を悪くして硬直している。

十治郎は不審に思い、竜太の持つ携帯を覗きこんだ。そこには、メールの画面が映っていた。だが、そのメールはおかしかった。

時刻 13/04/22 09:27

送信者 loozlhsqob@dokomo.ne.

jp

題名 Re:命令「序」

今から1時間目が終わるまでに、クラスメイトの誰

かを

選んで性行為を行う。制限時間以内に達成しなかった

場合は

あなたの家族が死ぬ。 X

先程まで騒いでいた十治郎は一瞬顔を歪めたが、苦笑いを浮かべて大声で言った。

「お、おいおい誰だよこのイタズラメール！　たく、気持ち悪いぜ！！」

十治郎が無理して笑っていることは、クラスの誰しもが見抜いていた。

そして、異変に気付いた全員が竜太の携帯を覗き始める。

この騒動に紛れて、明も竜太の携帯を覗きに行こうとしたが、弥生に止められた。そして、弥生の唇と明の唇が一瞬だけ重なった。

「ふふっ…可愛いね、明。」

いつの間にか、風見君から明と呼び捨てに変わっていた。

この時不思議と、2人がキスしているところを目撃しているクラスメイトはいなかった。

弥生は明の頭を撫でると、そのまま竜太の携帯を覗く集団の中に入ってしまった。

初めてのキスをされ、放心状態となって座っている明のもとに、七奈が首を傾げながらやってきた。七奈は明の隣に座ると、首を傾げながら尋ねる。

「どうしたの？　顔赤いよ？」

「な、なんでもないよ……はは……ははははっ！！」

なぜか笑ってしまった。

そしてそのまま、竜太の携帯を覗きに行った。

携帯を見た生徒たちは、なぜか表情を曇らせて困惑しているかのようだった。集団の一番後ろにいた明と弥生、七奈は最後に携帯の画面を覗いた。

周囲の生徒曰く、文章も問題だが、文章の下に添付された画像が問題らしい。

3人も、その画像を見て驚愕した。

手足を縄で縛りつけられ、口はガムテープで封じられ、目に涙を溜めた竜太の中学2年生の弟である一が写った無残な画像。

七奈は口を押さえ驚き、明もすぐに視線を逸らして竜太を見た。弥生は、画像を見ると平然としたまま自分の席に戻って行った。

「りよ、一だ……どうなってんだ？朝はちゃんと俺と一緒に……
…家をでた……これは、作り物だ。」

竜太は強がってそう言うが、その画像に映っているのが自分の弟だと確信していた。だから、涙を流していた。

「警察に連絡した方がいいんじゃない？」

女子生徒の誰かが言う。しかし、それを学級委員で成績1位の天才である秀山直俊が止めた。

「止めた方がいい。犯人を逆なですて、吉澤の弟君が危険に曝されるかもしれない。先生に言っただって、結局警察に通報される。返信し返して、要求を聞いてみよう。」

直俊の思案に誰もが頷き、賛同した。竜太はすぐにメールを打ち、相手に返信した。

すると、返信は数秒で戻ってきた。

時刻 13/04/22 09:40

送信者 loozlhsqobob@dokomo.ne.

jp

題名 Re:警告

返信した場合、また警察マスコミ関係に知られた場合

制限時間を待たずに、ゲームオーバーと見做す。

竜太は、膝から崩れ落ちた。

全員はそんな竜太を、見ていることしかできなかった。

そして、地獄へと扉は開き始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3559ba/>

オワリ －NO－ ゲーム

2012年1月9日14時50分発行